



In Laboratory Now

研究室訪問 2

英語で描く宮沢賢治の世界

Roger Pulvers 研究室～外国語研究教育センター



Roger Pulvers 教授

いまや日本中でその作品の研究がなされ、最も有名な作家の一人となった宮沢賢治。しかし彼自身は「田舎の童話作家」程度の評価しか受けられないまま、1933年、37年間の生涯を閉じた。

ところが67年に来日し、周囲が賢治を評価しなかった頃から、既に賢治の研究を行っている人がいた。その人こそが今回取材に伺ったパルバース先生である。先生は作家として活躍する一方で、賢治の作品を英訳し、発表していることでも知られている。今回は賢治の作品の英訳を通し、他言語といいかに向き合うべきか、語っていただいた。



宮沢賢治との出会い

「一番美しい文章を書く日本の作家は誰ですか」。これはパルバース先生が来日直後、京都産業大学でロシア語とポーランド語を教えていた頃に、大学の先生にした質問である。もしこの問い合わせを10人に投げかけければ、恐らく10通りの答えが返ってくるだろう。しかし1967年の日本で、宮沢賢治の名前が返ってくることはまず考えられない。

宮沢賢治の作品には独特的の癖がある。自身の故郷である岩手、そして幼少の頃から傾倒した法華経の教えなどに基づいて、賢治は理想的な世界を追求した。そして頭の中に「イーハトーブ」とよばれる理想郷をつくりあげたのである。これが賢治の作品の舞台なのだ。

イーハトーブに代表される独特の世界観から、生前の賢治は低評価を下され続けた。それは死後30年経って先生が来日した時もほとんど変わらなかった。しかしこのような中で、先の質問に対する答は宮沢賢治だったのである。

賢治の文章は視覚的に美しい。豊かな描写がなされ、それが当時の先生を瞬く間に虜にした。来日した翌年、先生は既に賢治の故郷である花巻にいた。

花巻に着き、先生はまず賢治の生家を訪ねた。戸口に掛かった表札を見て鳥肌が立ったという。軒下に立って呼んでみると、現れたのは賢治の実弟の清六さんであった。その後は清六さんに案内されて花巻を巡り、賢治の作品に想いを馳せた。

イーハトーブとは「岩手」をエスペラント語で読んだもので、賢治は岩手の中に理想郷を見出したと言える。先生は旅をするにつれて、賢治が岩手という土地に見た独特の魅力を感じ取り、賢治を可能な限り深く理解したいと思うようになった。そこで始めたのが賢治の作品の英訳だ。

今までに先生が手がけた翻訳は賢治の詩や短編にとどまらない。他の作家の作品はもちろんのこと、短歌や俳句までも翻訳している。しかし翻訳作業の中で最も時間を掛けた作品を挙げるとすれば、それは賢治の『銀河鉄道の夜』である。

30年近くに渡って推敲が重ねられたこの英訳は、賢治の世界を的確に描写しつつも、翻訳であることを感じさせない。まさに一字一句が選び抜かれている。今回の取材で伺ったのは、言葉を選び抜くプロセスである。そこには他言語と向き合う上での、本当の難しさがあった。



Deconstruction & Reconstruction

独特な癖を持ち、時として方言で描かれる賢治の世界をなぜ的確に英訳できるのか。その答は具体的な訳文の中に求めるしかない。しかし当然、訳文の中には細部に渡って訳者の意図があり、原文と訳文を単純に見比べるだけではその意図がわからない。そこで、右側の文章を用意した。これは『銀河鉄道の夜』の一節で、主人公であるジョバンニが、銀河鉄道に乗って旅を続いているところである。この一節の訳についてお話を伺った。

まず第一に先生は、訳す際に“deconstruction & reconstruction”すなわち「脱構築と再構築」が必要だと語る。熟読玩味して、文章の向こうに情景や原著者の意図を見る。そしてその情景を、意図に則って英文で描きとるのである。

賢治はこの文章の冒頭を「するとどこかで」から始めている。一方で、英文に目を移すと、それに対応するのは“Out of the blue”である。

「するとどこかで」を単純に日本語に置き換えるだけであれば、もちろん“Then suddenly from somewhere”で十分だ。そこを“Out of the blue”（「突然」の意味）にしたのにはわけがある。

ネイティブスピーカーは大抵、“blue”という言葉に導かれて空を想起するそうである。現在、「空」という意味はなくなっているが、“Out of the blue”とすることで、空を流れる天の川の情景を呼び起こすのだ。

この訳文には、英語と日本語の双方を知り尽くした人でなければおよそ窺い知ることのできない再構築が施されているのである。

他にも再構築の例がある。例えば傍線2の「蛍鳥戯の火を一べんに化石させて」の意味を考えてみる。これは、蛍鳥戯が最も輝いた瞬間に化石化して固められるということである。この段階が脱構築である。そして再構築を施した英文では“fossilised at their most radiant instant”と訳されている。言葉は違うが、同じ情景が、これら二つの文章から浮かび上がってくる。

以上の二例だけでも見事に同じ情景が生み出されているとわかる。そのことを全体の流れの中で確かめるために、原文と英訳を対照しながら、今一度右の全文を読み直していただきたい。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声がしたと思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなつて、まるで億万の螢鳥戯の火を一べんに化石させて、そら中にしめたという工合、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくなつたために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたといふ風に、眼の前がさあと明るくなつて、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦つてしましました。

気がついてみると、さつきから、ことことことこと、ジョバンニの乗つている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのでした。

宮沢賢治による原文

Out of the blue he was sure he heard a strange voice calling...

Milky Way Station ! Milky Way Station !

And before his eyes there was a flash flood of intensely bright light, as if billions and billions of phosphorescent cuttle fish had fossilised at their most radiant instant and been plunged into the sky, or as if someone had discoverd a hidden cache of precious jewels that the Diamond Company had been hoarding to bolt the price skyhigh, turning the whole treasure topsy-turvy and lavishing them throughout the heavens. Giovanni found himself rubbing his eyes over and over, blinded by the sudden dazzle.

By the time he came to, he had, for sometime now, been chugging along on the little train. It was really him on the nighttime narrow-gauge railroad, gazing out the window of a wagon with its little row of yellow lights. Inside, the seats, nearly all empty, were covered in blue velvet, and two big brass buttons gleamed on the varnished gray wall opposite him.

パルバース先生の英語訳



翻訳の深淵なる世界

パルバース先生の訳を読むと、単なる置き換えで済まされているところがほとんどないことに気づくだろう。同じインド・ヨーロッパ語族の言葉ならともかく、日本語と英語のように、文法的な構造も語義範囲も大きく異なる言語に対し、置き換えが通用することはほとんどないのである。

例えば、傍線3に「青い天蚕絨」とある。これを先生は“blue velvet”と訳している。

昔の車両の座席は大概の場合、緑なのであって、その意味ではgreenが自然である。実際に「青い信号」などはgreen lightとしない限り、英語圏では鉄道の信号と結びついてくれない。

一方で賢治の文章には、法華経に基づく仏教思想が隠されていることがあり、「青い」を訳すのには細心の注意が必要だ。青は、あの世や涅槃などのような、死後の世界への移行と結びついた色であって、それは英語の“blue”ともうまく一致しているのである。この問題に関しては専門家でも意見の分かれるところだ。度重なる議論の末に先生は“blue”と結論づけたのである。

「青」という単語一つであっても、単純に置き換えることはできない。これだけの考察、そして他の宮沢賢治研究家との議論の上で判断しなければならないのだ。

ところで、パルバース先生が賢治の作品を英訳するのは、英語圏の国々に賢治を紹介するためではない。なぜ英訳するのか。それは自身の勉強のためだという。

読むときはわかったつもりで読んでいても、訳すことで浮き彫りになる理解不足がある。その好例が傍線4の「ぼたん」だ。英訳が“buttons”になっているため、全文を読み比べた際に止め具のボタンを想定した人が多いのではないだろうか。

しかし、果たしてこれは止め具のボタンなのか、それとも花のぼたんなのかと訊かれたら返答に窮するのではないか。天蚕絨を張った腰掛けに「ぼたん」がついていたらまず間違いなく止め具のボタンであろう。では、壁についていたらどうか。真鍮製の花のぼたんの飾りが、壁についているという情景も考えられる。この原文における表現の曖昧さは、訳す際に初めてわかるものだ。



野原に佇む宮沢賢治

「読むときはわかったつもりで読んでいるが、言われてみるとわからないことがきっとある。でも、もし賢治が英語で書いたならばこういう英語を書いたんじゃないかな、と思って自分の母国語にすると、色々なことがはっきりしてきますよ。」

翻訳をする上で最も大切なことは、原著者である賢治が、もし他言語で書いたならどうなるのか、それを意識するところにある。この「原著者の視点」は、原文を読むだけでなく母国語で表現することによって、すなわち再構築を試みることによって、初めて得られるものである。そして「原著者の視点」こそが訳者に完璧な脱構築を促す。完璧な脱構築は的確な描写を生み、原文と同じ情景の創出を可能にする。つまりより適切な再構築を生むのだ。

再構築が脱構築を、脱構築が再構築を導く。再構築と脱構築は表裏一体であって、双方が促し合い、高め合うことで翻訳の質を向上させることができるというわけだ。



他言語と向き合うには

以上で見えてきた一節を訳すだけでも、非常に多くの難点に直面する。訳者として極めて豊富な背景知識が要求されるだけでなく、日本語の勉強として翻訳を始めたパルバース先生からすれば、言語の面での苦労も多分にあったに違いない。実際に、賢治の文章を読み始めた頃は、1ページを読むのにおよそ2時間半かかったそうである。

「膨大な時間を割いて、ベストだと思って完成させた翻訳を、10年後に読み返してみて愕然としましたよ。これは誰の訳なんだろうって。およそ自分の訳とは思えないほどひどい出来でしたね。」

一度完成させた翻訳を再び読み返すまでの10年間で、翻訳の技術が向上したというのも事実だろう。しかし日本語の上達に依るところもやはり大きいはずである。他言語を修得しようと思ったら誰しも努力を要求される。そのためにはある程度の歳月が必要であるし、まして翻訳家ともなれば相当な語学力が求められ、それはなおさらだ。

しかしながら、単に努力を重ねるだけで、他言語が身につくわけでもなさそうだ。どのようなことに気をつけたらよいのか先生に伺ったところ、passiveな知識とactiveな知識のバランスを常に意識することが大切なだとおっしゃった。passiveな知識というのはつまり「知っているけれど使えない言葉」であり、activeな知識というのは「知っていて、かつ使える言葉」である。

日本人は概してpassiveな知識に比べてactiveな知識に乏しいとよく言われる。もちろん先生もその点を指摘され、打開策を何度も模索し、その経験を活かして教壇に立っている。しかし最終的に最も大切なことは、個々人が自分自身のactiveな側面をいかに伸ばすか、それを考えることなのだと語る。

パルバース先生のお話は多くのメッセージを含み、とても興味深いものでした。紙面の都合で割愛せざるを得なかった部分も多々あり、その点が悔やまれます。

参考文献 Roger Pulvers 『英語で読む銀河鉄道の夜』

「語学を修得するには、人から語学の必要性を言われるからやるのではなく、自分からやるうでなければいけませんね。そして何よりも野心、情熱、好奇心がないとダメです。」

パルバース先生はアメリカに生まれ、英語以外の語学など必要ないという周囲の風潮の中で、自らの意志で数々國語を修得してきた。そして今でも情熱や野心を失うどころか、増してさえいる。実際に、話が将来像や芸術性のことにも及ぶと、先生は語気を強めてこう語った。

「人は歳をとると、野心が薄れたり、憧れがなくなったりすると言われるけれど、そうじゃないですね。反対です。私はこの前還暦を迎えたが、若い頃よりももっとradicalですよ。自分の今までやってきたことにも満足していないですし、もっと大きなことをやりたいですね。」

現在は東工大の芸術講座を担当され、English Yearの企画でも活躍されているパルバース先生。全く日本語が話せないまま、単身で日本に飛び込んでから37年。当時を上回るほどの大きな野心を、今でも胸に秘めている。



非常にお忙しい中、取材に快く応じていただいたパルバース先生には大変感謝しております。また、先生の今後一層のご活躍をお祈り致します。
ありがとうございました。 (小川 友彬)

ちくま文庫(1996年)